

「そんなことは すでに書いてある」という

お説教のありがたみについて

—研究資料の s/n 比を測定し、賢く研究しよう—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

Modified on 2010/03/25; Created on 2005/M/D

1 はじめに

言語学関係の学会に足を運ぶと、しばしば次のようなコメントを耳にする:

- (1) a. 「そんなことは すでに書いてある」
- b. 「そんなことは がすでに の中で言っている」

私はこの種のありがたい「お説教」を今までに繰り返し、繰り返し、繰り返し耳にした。その度に私は「何と下らないことを言うのだろう」と繰り返し、繰り返し、繰り返し呆れてきた。私にはそれが下らない理由は自明であったが、同じことが繰り返し、繰り返し、繰り返し起こるのを見ると、それは必ずしも自明ではないようだ。このエッセイでは、この種のコメントがいかにか馬鹿げているかを、研究資料の S/N 比という概念をもちいてハッキリ示してみようと思う。

論点を簡単に言うと、本当の問題点は資料の利用価値にある、ということである。すでに何かに書いてあるかどうか、誰かがすでに言っているかどうかが問題ではないのだ。ある情報が、誰でもアクセスできるような場所に、誰にでも取りだせるような形で提供されているかどうか問題なのだ¹⁾。仮に「すべての本についての本」が存在す

¹⁾例えば、紀要論文に書き散らしてあるだけの内容が発表で言及されていないことで腹を立てるのは、ハッキリ言って「お門違い」というものである。しかし文系の研究者(か研

るとしても、限りなく本物に近い似せた二セモノも無数に存在するような「バベルの図書館」²⁾でそれを探し当てることは不可能だ。そういう資料に利用価値があるとは誰も言わない。

2 研究資料の S/N 比

2.1 S/N 比とは

工学には S/N 比 (Sound/Noise Ratio) (単位は dB) という便利な概念がある。これは元々は音響工学の用語だったようだが、今では拡大解釈されて、多くの分野で品質の高低を表わすのに使われている。

S/N 比の基本的な概念を簡単に言うと、こういうことである:

- (2) ある情報源 X について、それから得られる“有益な情報”の量 (S) と“無益な情報”の量 (N) の比 S/N は興味深い特性をもつ。 X の S/N 比が大きくなるにつれ、 X の有用性は現象し、それが一定値を超えると、 X の有用性は消滅し、無用性のみをもつ不快源に変質する。

究者モドキ)には、こういう理不尽な理由で若輩者の発表に腹を立てる「偉い」方々がいる。こういう実証研究と文献学を混同している人々が学会で大きな顔をしていること自体、私には言語学の明白な後進性の顕われ以外の何モノにも見えない。

²⁾ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges) 作『伝奇集』(岩波文庫)に収録。

2.2 S/N 比は快/不快を定義する

これは重要な点なのだが、S/N 比の低い情報源の不快源への変質は生理学的な事実に基づいている。通常の感覚をもった人間にとって、S/N 比の低い状況で行動を続けることは、非常に苦痛である。S/N 比の高い情報源は快源であるのに、それが高くなると不快になるというのは生理学的な事実なのである。

S/N 比が低い状況のイチバンわかりやすい例は、人込みの多い場所—線路の近くとか—で集音声が高く、選択性の高い通話機を使って電話をする場合であろう。騒音のせいで相手の言っていることがサッパリわからないという、あの状況である。誰にでも思い当たる節があると思うが、そういう場合にイチバン効果的な打開策は、さっさと通話を打ち切り、別のもっと静かな場所、つまり S/N 比の高い場所に移って、通話をやり直すことである。これはストレスの少ない、効率的な作業のためには当然の行動である。

2.3 (人)文系の研究環境は S/N 比の低い研究資料で汚染されている

かつて、S/N 比の問題が深刻だったのは音楽再生の分野だった。だが、今ではデジタル録音が当たり前になり、それを載せている CD の音質が飛躍的に向上しているため、S/N 比が耐えられないほど低い音源に接する機会は少なくなった。

今、S/N 比の問題がもっとも深刻なのは、研究の分野—特に(人)文系の研究の分野—ではないかと思う。言語研究は(人)文系の研究の最たるものであり、当然、この災いから免れない。実際、言語研究では分野を問わず(2)に示したような拡大解釈された意味での S/N 比の低い研究資料で溢れ返っている。私はなぜこのような不快源が駆逐されないで残っているのか、不思議でたまらない。参考までに S/N 比が低い文献の一例として §A で Lakoff [1] を挙げる。

S/N 比が低い資料研究資料を読み進めることは、普通の神経をした人間にとっては猛烈な苦痛であ

る。従って、普通の神経をした研究者がそのような研究資料を避けるのは、当たり前のことである。

2.4 特別な耐性?

さて、(1)の発言に現われる は、私の知る限り、例外なく S/N 比が低い研究資料である。私は、これが現実のすべてを説明していると思う。

だが、不思議なことに(1)のような「お叱り」を授けて下さる先生方は、どうやら のような猛烈な不快源に対して、何か特別な耐性があるようなのだ。これは私には理解できない。彼らは何か特別な修業をして、知性に対する放射能にも耐性を獲得したのだろうか?? それとも彼らは肉体というものを超越し、もはや人間ではなくなっているのだろうか????

2.5 訓詁学を拒絶する権利

普通の人間は、幾ら学問のためであるとは言え、そのために人間であることを止めてしまうような、特別な耐性を獲得する必要はない。そのような要求に対しては、人道、人権の観点から断固として拒絶するべきである。

S/N 比が低い研究資料が氾濫する研究環境で仕事を進めることは苦痛であり、それは通常の感覚をもった人間に続けられることではない。ある研究の分野で S/N 比の低い研究資料がもっとも「基本的」な文献であるとしたら、それはまともな研究環境ではない。そこで成立しているのは、ただただ訓詁学のみである。訓詁学は科学的な意味での真理の探究ではなく、単なる「我慢比べ」である。

人間の生理、権利を尊重する限り、訓詁学という形で理不尽な苦痛への耐性が強要される状況は不自然であり、S/N 比の観点から研究者の精神衛生を保護することを考えない限り、(人)文系の研究は死んだままであり続けるだろう。

私はこの現状を拒絶する。その正当化のために §3 で反訓詁学宣言をする。

2.6 結論

大先輩から(1)のようにお叱りを受けたら、まずのS/N比のことを考えよう。それが非常に高い値だったら、素直に自分の不勉強を恥じよう。

反対に、それが自分にとって耐えられないほど低い値を示すものだったら、ハッキリそう言おう。何らそれを恥じることはない。それは自分の無知、無能を晒すことではない。あなたは自分の人間としての(知的)健康を維持するために正しい戦略を取っただけなのだ。

3 反訓詁学宣言

3.1 はじめに

私は(いちおう)言語学の研究者であるが、根っからの自然科学者である。この条件には一長一短がある。今回扱うのは、短所の話である。科学者の精神をもちながら文系研究者が主流である研究集団に帰属することは、誇張なしに言って、頻繁に重度の精神的苦痛を伴う。以下では主に、私が日頃感じている精神的苦痛に関して論じ、その原因となっている問題に対し、幾つかの提案をしたい。

3.2 訓詁学的傾向の持つ研究者の特徴

私が文系研究者と一緒にいて根本的に苦痛を感じるのは、彼らの多くが、自分で観察した事実よりも書物に書かれていることを重要視するという点である。私は、これを文系研究の訓詁学的傾向と呼ぶ。

訓詁学的傾向にあるのは短所のみで、長所は一切ない。以下では、この傾向をもつ研究者の特徴を幾つか揚げ、問題点を明らかにする。訓詁学的傾向の強い研究者は、事実を見ない。訓詁学的傾向の強い研究者は、最後の最後にはデータや事実ではなく、権威に縋ろうとする。彼らは仮想現実の住人である。訓詁学的傾向の強い研究者は、仕事が遅い。事実を観察するより、下らない書物を漁って時間をムダにするからである。訓詁学的傾向の強い研究者は、自分の頭で考えない。自分

の手足を使って働かない。彼らは自分の頭を使って考えている時間や、自分の手足を使って実験する時間より、どうしようもないことしか書いてない本や論文を読んでいる時間が圧倒的に長い。文系学問の明白な後進性は、この辺に原因がある。訓詁学的傾向の強い研究者は、「そんなことは書かれていない」とか言って、どうでもよい相手の言葉尻を捕まえるのが得意である。彼らは、モノゴトの本質というものが解っていない。訓詁学的傾向の持ち主は、深読みができない。彼らの理解は表層的である。お師匠の本や論文に明示的に書かれていない、話の「裏」を読み取ることすらできない。訓詁学的傾向の持ち主は、例外なく権威主義的傾向をもつ。彼らは「お師匠」の文書に書かれている内容のみを盲目的に信用し、それを批判的に読み、新たな事例に応用することができない。訓詁学的傾向の持ち主は、新しい仕事ができない。いつまでも、いつまでも、いつまでも、同じような事例ばかりを扱っている。彼らの仕事は同工異曲の極みである。彼らは二重に資源のムダ遣いをする。第一に、下らない内容の論文や書物に費やされる物理的資源としての紙のムダ遣い。第二に、そういうものを他人に読ませて、貴重な時間をムダにさせるという間接的犯罪を犯している。訓詁学的傾向の強い研究者は、自分の理性よりも(役に立たない)知識を尊重する。科学者の精神をもつ私には、そういう人間を相手にするのは、ハッキリ言って苦痛である。

3.3 ある苦痛の経験

自然科学者の精神をもつ私が最大に苦痛を感じるのは、訓詁学的傾向の強い相手と議論になった場合である。話はいつも平行線になる。その原因は、訓詁学的傾向の強い研究者は、文献にハッキリ文字で書かれてることしか「主張」として認めない。文章化されてはいないが、ある主張によって含意されることや、それから論理的に帰結されることは、ハッキリ書かれていないからという理由で、まるで主張されていないかのような態度を取る。なぜそうなるか?理由は簡単で、彼らには

深読みの能力が、自分の頭で考える能力が不足しているからである。ハッキリ言わせてもらう。このような相手とは科学的な議論にならない！言った」「言わない」を争うのは、子供のケンカのレベルである。主張の是非をそういう表層的なレベルで議論するのは、モノの解っていない愚か者のすることである。因みに、文系研究者の多くが小役人的なのは、彼らのモノゴトの表層的理解の反映であろう。事態はこんな風に進む。私が言語学者 L の、とある枠組み F を批判する。これに対し、F (か、L か、あるいは、その両方) を鼻屑する論争相手 X は、しばしば私に言う: 「そんなことは L の著書や論文には書かれていない」「あなたは L のこれこれの文献を読んでいますか?」「あなたは L の枠組みを正しく理解していない」訓詁学的傾向の強い相手は常に、こうやって 研究の「文脈」とか「伝統」とか言う不透明な権威をもちだして、私の理解が「正しくない」ことを指摘しようとする。もちろん、私は訓詁学に従わない一科学者として、そのような下らない権威に挑戦しているのだ。私が常々問題にしているのは、いわゆる「基本文献」を読んだ上で、その理解の「正しさ」は何が定義しているのか?ということ、つまり、ある言語学的な枠組みの根本的妥当性の問題なのであるが、私の問題提起は「深すぎ」「過激すぎ」で、いつでも、まったく理解されない。砂を噛むような思いとは、これのことだ。私は相手をマトモな科学者として扱ったが、それが失敗のモトだったというわけである。訓詁学者の皆さんへ。あなた方のやっていることは、科学ではない。あなた方は、「説明」「観察」「記述」「予測」「反証」「反証可能性」などなど、いかにも科学的な語彙を使い、科学をしているかのようなふりをしているだけなのだ。あなた方は、本当の科学がどんなものであるか知らないで「科学ごっこ」をしているだけなのだ。表面的に理系研究のスタイルだけを真似ても、あなた方のやっていることは科学にはなりませんよ。言語学に限らず、何かを科学的に研究しようと思うなら、今からでも遅くないですから、訓詁学から足を洗ってください。

3.4 結論

科学的研究で最終的に評価されるべきなのは、主張の妥当性であり、そのための予備知識ではないはずなのに、人文系の研究では、訓詁学的な伝統故に、このことが本末転倒になる傾向が極めて強い。これでは人文系の学問が停滞するのあ当然の成り行きである。実際、私はこういうバカバカしい伝統がキライで京大の文学部には残らなかったのである。しかし、訓詁学は思った以上に広汎に人文系の研究にはびこっている。次のことは明白である。訓詁学的傾向は、科学者のための知的環境への汚染である。訓詁学の悪臭のしない、清浄な空気が、科学者の周りには必要だ。実際、訓詁学的傾向は科学者にとって猛毒なので、ほとんどの科学者は訓詁学で空気の汚れたところには近寄らない。私は科学者としては二流以下なので、幸か不幸か、たまたま訓詁学的汚染に耐性があつたというだけの話だ。だが、これは私自身にとって良いことなのか悪いことなのか、極めて判断しがたい。自分の科学者としての人権のために、私は今、ここに、反訓詁学宣言をする。私は今後、人文系の研究における悪しき訓詁学的伝統を自分の周囲からなくし、いずれ一流の科学者が安心して入って来れる位に清浄な空気が横溢するような環境を整備できるように、最大限の努力をしよう。

A Lakoff の「説明」

反訓詁学の態度が必要になる劣悪な例として、Lakoff [1] の説明を取り上げる。

A.1

Lakoff [1, p. 288] は比喻写像を次の引用にあるように特徴づけるが、ボールド部はまったく意味をなさない:

- (3) A metaphoric mapping involves a source domain and a target domain. The source domain is assumed to be structured by a propositional or image-schematic model. The mapping is typically partial; it maps the structure of the ICM [i.e. *Idealized*

Cognitive Model] in the source domain onto a corresponding structure in the target domain. As we mentioned above, **the source and target domains are represented structurally by CONTAINER schemas, and the mapping is represented by a SOURCE-PATH-GOAL schema.**

- (4) A metonymic mapping occurs within a single conceptual domain, which is structured by an ICM. Given two elements, *A* and *B*, in the ICM, *A* may “stand for” *B*. **The “stand for” relation is represented structurally by a SOURCE-PATH-GOAL schema. If *B* is a category and *A* is a member, or subcategory, of *B*, the result is a metonymic category structure, in which *A* is a metonymic prototype.**

ここでの説明は、概念のなす体系 *S* を (i) 一種の抽象的空間 *S'* と見なし、それに続いて (ii) *S* を実空間と同一視している。このような同一視を仮定しない限り、この説明はまったく意味をなさない。このような同一視はいずれもメタファーなのであり、これらのメタファーはアナロジー、あるいは“例え話”として成立するかも知れないが、断じて意味や概念体系の神経的表現 (neural representations) とはならない。従って、控え目に言っても、このような説明を真に受けることは危険である。

問題は SOURCE-PATH-GOAL スキーマの実体性にあるのではない。それ以前に、記述手段 (i.e., メタファー) と記述対象 (i.e., 概念構造) の混同があり、それが気づかれていないことが問題なのである。

A.2

(3), (4) の説明が意味をもつ基盤は二つのメタファー: “CONCEPTS ARE OBJECTS IN THE BRAIN” (以下, CAOB メタファー) と “CONCEPTUAL STRUCTURE IS A PHYSICAL SPACE” メタファー (以下, CSPS メタファー) である。

CAOB, CSPS メタファーは脳内処理を比喩的に“物象化”したものであり、概念構造に関する“素人的な理解”を得るには役立つかも知れないが、科学的な意味で概念構造の表現モデル (representational model of conceptual structure) としては根本的に誤

っている。モノが何らかの形で (おそらくは素性で) 抽象的に表現 (represented) されているだけで、脳の中にはモノ (objects) のある容器 (container), i.e., 部分空間 (location in a space) など存在しない。これは次の引用 [1, p. 292] にある、彼が自分で言っていることに明らかに矛盾する:

- (5) Meaning is a not a thing; it involves what is meaningful to us.

というのも Lakoff は CAOB, CSPS メタファーで概念をモノとして扱っているからである。これは記述手段 (descriptive means) の記述対象 (described objects) との混同としか言いようがない、救いようのない混乱であるが、これが [1] の随所に横溢している。このような箇所を読むのは、しばしば知的に苦痛である。これは [1] が提供している真に洞察力のある事例分析と著しい対照をなす。彼が読者に注意を促す事実とその分析はカケ値なしに称賛に値すると思うが、それに対して彼の与える説明というか“解釈”は、ほとんどクズ同然である。

A.3

重要な点を繰り返すが、(3), (4) の Lakoff がポールド部で与えている比喩写像の基盤の“説明”は、CAOB, CSPS メタファーという、“より深いレベルでのメタファー”の成立を前提にしている。従って、CAOB, CSPS メタファーが成立する基盤が示されない限り、比喩写像の説明は空虚なのである。

CAOB, CSPS メタファーには経験的基盤など存在しない。それは概念の構造の研究者の (比喩的) 理解のために必要となるだけで、概念構造が脳内でいかに表現されているかという実体とは何の関係もないことだからである。概念体系は脳の活動の所産であり、それは脳細胞の活動パターンの結果以上のものだと思える合理的な理由はない。これが意味するのは、概念体系は脳細胞の分散制御と分散表現によって実現されている抽象的な構造だということではなく、その構造自体を、脳細胞の活動パターンの結果であるはずの SOURCE-PATH-GOAL スキーマや CONTAINER スキーマ

がその原因である構造を“構成”することは、原理的に不可能なのである。Lakoff が [1] にある多くの基本的な議論で行っているのは、記述手段と記述対象の区別を無視し、記述手段が記述対象だと同一視した上で、記述手段の特徴によって記述対象を“説明”することなのである。この錯誤は、Lakoff [1] という本を読む際には絶対に見逃されてはならない。

参考文献

- [1] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』(池上 嘉彦・河上 誓作 訳). 紀伊国屋書店.]